

# Principal Correspondence

## 「リリーベールの自立の心はここからきています」

新しい年度になり、リリーベール 22 年目が始まります。草創期が終わり、充実期にふさわしい、新しく優秀な校長、鈴木研介先生が誕生しました。どうぞよろしくお願いいたします。新校長の願いでこの欄は引き続き学園長が担当することになりました。もうしばらくお付き合いください。

最近の日本の諸相を見ていると日本人は欲求のままにやせ我慢がなくなってきたと思います(もちろん私も反省を含めて・・)。多様性の名のもとに我慢ができない人が増えました。特にバブル(30 年前のことですが)作家の司馬遼太郎さんが「このバブルの風潮は人間をダメにし、日本人を悪くし、何十年もその後遺症で悩むことだろう」と看破しておられました。それがその通りになりました。元来、額に汗して働くことを尊ばず投機や土地ころがしで国民みんなが幸せになれるはずがなかったのですが、誰も浮かれて耳を貸さなかったのです。

「やせ我慢」とは「自立」の精神であります。



英国で生まれたスポーツは、ゴルフもラグビーもサッカーも、雨でも、場合によっては嵐でもやりますが、これなどは、考えようによっては、「やせ我慢」の極致です。しかし、このたくましいジョンブル精神が生き活きと生きていたころ大英帝国は(ヴィクトリア女王の時代)世界の覇者でした。



司馬遼太郎さんによると日本も「武士は喰わねど高楊枝」の武士道精神が生きていたころの明治の人々は世界の発展途上国では恐ろしく賄賂が少なく、我慢をして教育に投資をし、実力主義の生き活きとした時代だったといえます。それ故、日本は有色人種で初めての先進国になりました。

ほとんどの発達途上国が戦後独立して 80 年も過ぎているのに未だに先進国になれないのに比べると・・何という違いでしょう！

自立は「自己犠牲」も伴います。およそ人は経済原理で動く(つまり損得そろばんで基本的に動いている)動物ですが、その中でも社会や国家のため、あるいは広く人類のために志を持って動く人がおります。というか、誰もが「社会のために」という志を心に何パーセントか(人によっては何十パーセント)持っているといった方が適当かもしれません。

これからはその「自己犠牲」の精神を持つ人がどれだけいるかで、国力がはかられる時代であると思います。ただし、その自己犠牲、奉仕の精神は、誰かに強要されるものではなく、個人の自由意思で決めるものです。そこが戦前の自己犠牲とは異なるべきものです。

人々の心から毅然とした誇りや、やせ我慢が無くなって、万事、安易な方へ、安易な方へと流れるとき、一つの文明は内部から崩壊していくのは歴史の語るところです。

# Principal Correspondence

## 世界に見る学童保育

学童保育とは、放課後に児童を預かる場所であることは皆さん重々承知のことと思います。日本では政府が近々に運営の基準作りを行い、新しい保育分野として確立して参りました。

では、諸外国の学童クラブは、政府・国とどの様な連携をとっているのでしょうか。



**スウェーデン**での学童クラブの歴史は古く、1887年にその施設が誕生したと言われています。長い歴史がある分、政府が学童保育のあり方に大きく関わるようになり今日に至ります。政府と国会が全国的な目標・方針やカリキュラムを決定し、それぞれの学童保育の現場でそれに沿った運営をおこなっています。

**北欧**にはペタゴといわれる資格(保育士と介護士を合わせたようなもの)がありその資格保持者が学童教室を運営しています。ちなみに日本では、放課後児童支援員の資格を持たねばなりません。

**英国**や**アメリカ**では、学童はアフタースクールクラブと呼ばれています。こちらは日本の様に小学校の一部でおまけのようにやっている所や独自に ICT(インフォメーション・アンド・コミュニケーション・テクノロジー)のカリキュラムをもって進んだ教育をしている所もあります。私も学童クラブ創立当時、米国や英国、デンマークの学童を視察してきました。

**私たちリリーの学童**はこれまで「育脳学童」として「ただ時間つぶしのために安全に預かる学童」から**進化し、「学童保育でしかできない教育」、「異年齢の人間関係知能」の発達を中心に独自のカリキュラムプログラムでやって参りました。**

リリーの指導者はすべて大卒者あるいは学校教諭資格・保育士資格を持った、放課後児童支援員で構成しています。

日本では、まだ政府が学童保育の必要性を認知したに過ぎない段階ではありますが、**今後学童はより一層の発展が望まれる分野かと思えます。**

